

3月レポート 「フィンドレー市長インタビュー」

3月に入り、ようやくフィンドレーも暖かくなりはじめました。プレゼンテーションやレポート、その他課題に追われ非常に忙しい日々を過ごしています。そうした中でも、2月レポートでもお伝えした親善大使としてのインタビュー企画にますます力を入れています。3月レポートではフィンドレー市長、リディア・ミハリック氏への貴重なインタビューの様をお伝えします。

前回のレポートで紹介したとおり、私は福井県からの親善大使とともに、フィンドレー大学学長、前学長、市長にインタビューし、対談集を作成する日米親善企画を立ち上げました。埼玉や福井の特に高校生をターゲットとし、この留学プログラムや留学すること自体への関心向上を狙いとしています。既に全員へのインタビューを終え、現在は編集作業を行っています。録音した音声を何度も聞いて文字におこし、要点を日本語に訳します。非常に時間がかかり大変な作業ですが、私たちが聞いた貴重なお話をきちんと読み手に伝えられるよう、努力しています。まだ対談集は完成していませんが、具体的にどのようなインタビューを行ったのか、フィンドレー市長を例に一部紹介したいと思います。

図1：Mrs. Lydia Mihalik(リディア・ミハリック市長)

フィンドレー市長はまだ30代の若い女性です。非常に明るくて、活発な印象を受けましたが、特にインタビュー中は表情を変え、物事を常に真剣に深く考える聡明な方だと感じました。市役所の一室で行い、1時間のインタビューの中で20問ほどの質問をしました。大きく分けて3つのテーマを設定し回答を得ることができました。「市長の学生時代」、「ダイバーシティをどう捉えるか(ここでは主に留学や異文化交流の意義)」、「女性市長として」の3テーマです。



インタビュー全体を通して、市長のダイバーシティへの捉え方が印象に残っています。一般に「ダイバーシティ」は「多様性」と訳されますが、今回のインタビューでは、市や大学内に国籍の異なる人々を持つこと、また、女性の社会進出を促すことの二つの多様さが言及されたと思います。市長はどちらに關

しても非常に肯定的な考え方を持っています。

1つ目の多様性に関して、異文化交流の経験が先入観を抱かず、新しいものや人に心を開く彼女自身を形作っていると語ってくれました。また、海外留学の価値を認め、留学を通じ、様々な考え方や価値観に触れることで、自分にとって「快適な場所」に留まっている人よりもはるかに広い視野を持った人になれるとも伝えてくれました。実際に2人のお子さんにも将来は是非留学を勧めたいとのことでした。

また、男性が圧倒的に多い政治決定の場に女性を増やすという意味での多様性に関して、力強く語っていただきました。政治に限らずビジネスにおいても日米ともに圧倒的に男性が重職を占める状況が続いています。そうした中、弱冠30代の女性が市長を務めているという事実は、社会にプラスの意義をもたらすと思います。インタビューの中で市長は女性も男性と同じように仕事をし、もちろん金銭面においても家庭を支えることができると強調していました。例えば日々の会議で、そのテーブル唯一の女性であることが多いそうですが、なんら特別なことはなく、自らの仕事を「ただやるだけ」だとおっしゃっていました。多くの女性に必要なのは強い信念であり、本当に成し遂げたいことがあるならただそれを掴みに行けば良い。社会の目、風潮など気にせず挑戦し、それを達成するだけだと語っていたのが印象的です。市のリーダーという重職を担いながらも夫と支え合い、仕事と家庭のバランスをうまくとっているという市長。女性の社会進出が叫ばれる今、市長はまさに理想を体現している存在だと感じました。

図2：インタビューの様子(市役所にて、左：福井親善大使、中：私、右：市長)

